

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 北尾靖雅

マスターアーキテクト方式を用いた建築集合体の環境設計方法

本論文は巨大システムである都市で人間と自然の調和が可能な環境を形成するために「都市の中の都市」スケールの建築集合体の設計を可能とする一つの方法として、専門的な知識や技術を持ち設計内容を調整するマスターアーキテクト（MA）方式に着目して、①建築集合体設計上の問題の所在、設計プロセスでの②調整、③連携、④展開の方法の考察を通じて、MA方式による建築集合体設計プロセスに関わる知見を得ることを目的としている。本論文は、序論、結論、及びその他の3部7章から構成される。

「序論」では、研究の背景、用語の定義、研究目標、関連既往研究、研究の意義・視点、現在の問題点を挙げ、複数設計者参加による設計の現代的意義を論じている。そして、MA方式の系譜を具体的事例に基づいて明らかにし、その方式に対する専門家の認識状況の把握をしている。

「第1部：設計調整方法の考察」 第1章では、複数設計者が一体的に建築集合体を設計できるための必要な調整方法を明らかにするために類似の協働設計方式事例を調べ、本論で考察する4事例（南大沢15住区、滋賀県立大学、阪南スカイタウン、さいたま新都心）の①〈集合モデル〉と〈建築集合体の構想〉、②協働設計枠組、③設計内容決定の仕組、④設計内容誘導方法、⑤誘導方法の構成を比較検討している。第2章では、MAの調整行為を考察するために阪南スカイタウンを対象として、設計プロセスでのMAとブロックアーキテクト（BA）の協議記録から①MAの立場、②調整の対象、③調整行為と項目の関連、④調整行為内容を調べ、MA役割は「アーキテクトコーディネイター」と「アーキテクチャーコーディネイター」に分けることができ、「理念」を軸にBAとの応答を行い協働を推進する役割がある事を明らかにしている。

「第2部：設計連携形成の考察」 第3章では、一括敷地型に適用され複数BAがひとつの設計者集団となった設計プロセスで誘導と調整が行われた誘導調整型MA方式を、南大沢15住区的设计事例を対象に、設計報告書と設計調整議事録を用いて、設計者の連携形成を①要素・項目・意図・背景の抽出、設計調整の②内容・背景、③環境形成の内容、④設計連携プロセスについて考察し、BA同士が街路・広場の設計で継続的な相互影響を受け、MAが示す構想・素材により統合と環境形成が組み立てられていったプロセスを明

らかにしている。第4章では、分割敷地に適用され複数事業者の違いを越えてBAが一体的に建築集合体を設計する調整型MA方式を〈さいたま新都心〉を対象にBA作成の設計提案書を用いて、BAの設計調整①作業、②順序・パターン、設計決定での③「制約」発生状況、BAの設計調整④内容について考察し、設計調整は「展開」「基準設定」「協議」作業より構成され「制約」が設計プロセス短縮化を担うことを明らかにしている。

「第3部：設計展開プロセスの考察」第5章では設計内容調整用のデザインコードやマスタープラン運用方法と設計に対する役割を考察するために滋賀県立大学の事例を対象に①設計指針に対するBAの解釈、②BAの建築集合体設計内容、③その解釈と関連を考察し、設計展開の際に設計指針をBAが独自解釈し、それをMAが認める事で多様性・個別性のある設計展開ができる事が明らかにしている。第6章ではMAとBA間で設計内容に関する意見の「相違」を乗り越え合意形成をはかる方法を考察するために滋賀県立大学の設計プロセス議事録を用いて、相違の①発生状況、②解決のタイプ、③解決方法、④その根拠を考察し、合意形成にはMAの設計技術と社会的勢力が影響した事を明らかにしている。第7章ではBAの設計展開を建築集合体に統合するプロセスでの設計根拠を考察するために滋賀県立大学でBAが作成した設計図を用いて「形態」の①展開傾向、確定②方法、③根拠を考察し、MAの個人的創造の源泉や疑似設計などにより「形態」が決定される事や物体形態原理により「形態」が統合される事を明らかにし、集合形態モデル〈構想〉の存在により設計展開でMAとBAが「形態」を軸として協働的設計が展開できる事を示している。

「結論」では以上の考察を総括して、MA方式が多様と秩序をあわせ持つ混在型建築集合体を設計できる方法であることを示し、2つの相異なる方向の設計展開を同時に実現する具体的な設計方法、設計プロセスでの変化に対する柔軟性や集団創作の仕組みが〈かかわり合いの程度〉の問題である事を明らかにし、MA環境設計プロセスの基本構造を解明している。

以上のように、本論文は21世紀を迎えた現在、無秩序な開発を見過ごした「都市」の計画設計において、人間同士の交渉を取り入れた設計プロセスを建築集合体設計において意図的に行うことで、全体性のある建築集合体の設計が可能にするためのMA方式について、詳細な事例分析を通して設計プロセスを解明したものであり、建築計画学の発展に大いなる寄与を行っている。

よって本論文は博士（工学）の学位論文として合格と認められる。